

## 言葉の壁より、心の橋を

宮崎県 宮崎市立久峰中学校 3年  
鳥原 紗英（とりはら さえ）

私は中国で生まれ、日本と中国の両方で育ってきた。父は日本人、母は中国人。私にとって二つの国はどちらも「ふるさと」であり、自分の一部である。これまで、何度も新しい学校に通い、新しい友達と出会い、新しい環境で生活してきた。中国では「日本人だ」と言われ、日本では「中国人でしょ?」と聞かれることがよくあった。どちらも間違いない。でも、私は、「私は私」だと思っている。

ある日、日本の学校で男子生徒に、「中国人」とあだ名のように呼ばれたことがある。からかい半分の口調だったが、私は少しショックを受けた。中国人が嫌だったわけではない。私は日本国籍だし、国籍や出身で人を呼ぶこと自体が、失礼で不快に感じた。まるで、「あなたはこっち側じゃない」と線を引かれたような気がして、悲しかった。

この出来事をきっかけに私は「人を一つのラベルで決めつけること」の怖さを意識するようになった。人は、出身や見た目、話す言葉だけでその人のすべてが決まるわけではないのに、なぜ多くの人が無意識のうちに誰かを分類し、無神経な言葉を投げかけてしまうのだろう。

でも、言葉や文化が違って、笑ったり助け合ったりして心はつながると思う。しかし、年齢を重ねるにつれて、もっと複雑な現実にも気づくようになった。SNSやニュース、コメント欄などには、「中国人はマナーが悪い」「歴史を反省していない」など、心ない言葉があふれていた。誰か一人の行動を、まるで国全体の特徴であるかのように言い、それを信じてしまう人がいることに驚いた。そんな決めつけや偏見を言う人の姿はとても醜かった。そして、中国に対しての悪口も、日本に対しての悪口も、どちらも「自分自身の一部を否定されているような気持ち」になる。

こうした問題は、日本と中国の間だけで起きているのではない。世界中で、国や文化、宗教、見た目の違いなどによって、人と人の間に「壁」ができてしまっている。SNSでは、事実と違う情報があつという間に広まり、誤解や偏見が強まってしまうこともある。私たちは、知らず知らずのうちに「見た目」や「国籍」

で人を判断してしまっているのかもしれない。

だからこそ、私は「人と人、国と国をつなぐ橋」のような存在になりたいと思うようになった。たとえ、言葉が通じなくても、文化が違ってても、相手の気持ちを理解しようとする努力があれば、心はつながる。私はその「橋」をかける一歩として、日ごろから誰かを一つのラベルで判断しないように意識している。そして、私自身が持つ二つの文化を活かして、周りの人と異なる価値観を共有することで、互いの理解を深めたい。

人権とは「一人ひとりが自分らしく生きるための土台」だと私は考える。見た目や出身、名前や話し方だけで誰かを決めつけず、その人自身の中身を見ようとする。それは特別なことではなく、今日からでも誰もが始められることだ。そして、あの日のように「中国人」と呼ばれて、傷ついた私がいたように、何気ない一言が、誰かの心を深く傷つけているかもしれないことを多くの人に知ってもらいたい。

「言葉の壁より、心の橋を」。この言葉には、私の願いと決意がこめられている。本当に大切なのは、国や文化の違いではなく、その人の思いや生き方を尊重すること。たとえすぐに分かり合えなくても、お互いに歩み寄る気持ちを忘れなければ、きっと橋はかかっているはずだ。

差別や偏見のない社会は、誰か一人で作るものではない。私たち一人ひとりの意識と行動によって、少しずつ形づくられていくものだ。私はこれからも、「心の橋」をかける努力を続けたい。そして、いつか誰かの背中をそっと支えられるような、あたたかい存在になりたいと思っている。